

減らない暴走ドライバー

先日、友人があやうく事故に巻き込まれそうになった。コンビニを出たところで、前から車が突進してきたとのこと。最近ニュースなどでよく見る高齢ドライバーのアクセルとブレーキの踏み間違いによるものだった。

実際に自分の腕をかすめて車が店の中に突っ込む様を目にした恐怖は、数日たっても消えなかったそうだ。彼はこんなふうにした。

「寿命が縮まりましたよ。自分の父親も古希を過ぎているので、そろそろ免許を自主返納させたほうがいいかな」

ある調査によると、ドライバーは40代から60代にかけて、運転能力への自信が低下するそうだが、65歳を過ぎると逆に「自信あり」と答える率が高まる。中高年にさしかかれば当然のこととして、視力や反射神経の衰えを自覚するものの、老年期になるとそれまで大きな事故を起こさなかったことを理由に「まだ大丈夫」と主張するようになる。

「若い者に負けるものか」という意識も、プライドの源泉として高まるのだろう。

そうした反応自体が老化現象の一部なのだが、本人は頑として認めない。運転免許証を取り上げられることは、アイデンティティの喪失に直結するからだ。

家族からの説得に聞く耳をもてるようならまだ柔軟性があるのだが、残念ながらそれは期待薄だ。息子や娘からの説得となると逆効果。「子どもが親にエラそうな口をきくな」というわけだ。効果があるのは、多くの場合、孫からの言葉らしい。

「おじいちゃん、わたしはバスのほうが好き。一緒に乗って」。頑固な高齢者も、かわいい孫からのお願いには弱い。

歩きスマホはしないと決める

暴走ドライバーほどではないものの、いまや日本中どこでも当たり前となった歩きスマホも困った現象である。社会人のマナーとして「やめましょう」とのポスターやアナウンスはそこかしこで見聞きするものの、減りそうな気配はない。㈱リビジェンの調査によると、10代から20代の若者の8割以上が歩きスマホの経験者だそうだが、この数値は、対象を30代以上の社会人に広げてもそんなに変わらないのではないか。

もしあなたが1日、歩きスマホの歩行者と遭遇しても決して道を譲らなかったとしたら、確実に何人かと体がぶつかるだろう。

駅でのトラブルや街路での接触事故の類いは日常茶飯で、大事に至らなければニュースにもならない。

日本のモノづくりや建築・工事などの現場では、安全管理の教育が厳しく行われている。それによって高い安全意識が身についた人は、日常生活においても指差確認が習慣になるほどだ。1件の重大事故の陰には29件の軽微な事故があり、その陰には約300件のヒヤリやハッとさせる現象が隠れているものだと「ハインリッヒの法則」は教える。だからヒヤリやハッとさせる体験を無くそうとする努力が、安全を確保するうえでは欠かせないのだ。

それはすでに多くの会社の常識であり、それを知る人が歩きスマホをやめるだけでも、世の中の風景はだいぶ変わると思うのだが。

歩きスマホが危ないと理解する能力があるなら、「決してやらない」と心に誓おう。安全に関しては例外を作らないことが大原則。本誌の読者すべてに取り組んでいただけることを願うしだいである。